

目的 能装束は演能において、その効果を最高に発揮するために着装されるものである。他の演劇のどの種類にもない松羽目だけの簡素な舞台と最少限度の小道具類とは対照的な華麗な衣裳は、そこに施されている染織、文様ともに、一般の衣裳とは全く異つた独自の舞台衣裳として完成されたものである。今回は熊本県八代市の松井家に伝わる能装束の一部について、その文様と色彩について調査を試みた。

方法 上衣（厚板、縫箔、唐織）外衣（法被、長絹、狩衣）について、まず写真撮影を行い、色彩に関しては実物個々について、日本色彩研究所編の調査用カラーコードを用い、地色と細部の文様の色を調査した。文様についてはスケッチと写真撮影の結果を総合し、更に能装束の文献を参考資料にした。

結果 日本伝統の染織工芸の最高水準といわれる文化遺産としての能装束も、その宿命は150年位が限度とされている。調査対象の装束も永い年月、よくも保存されたと思われるものばかりで、消耗度のはげしい部分は折目がすれ、色も褪せているが、他の部分は古色さん然とその美を誇っている。

文様は植物、動物、人造物、幾何文様をテーマとし、装飾文様としての構成、配置は完璧なものである。色彩はR圏、YR圏、YG圏、P圏、RP圏、など出現が多いが、地色に対して実に広範囲の色彩が施され、華麗な雰囲気を作り出している。